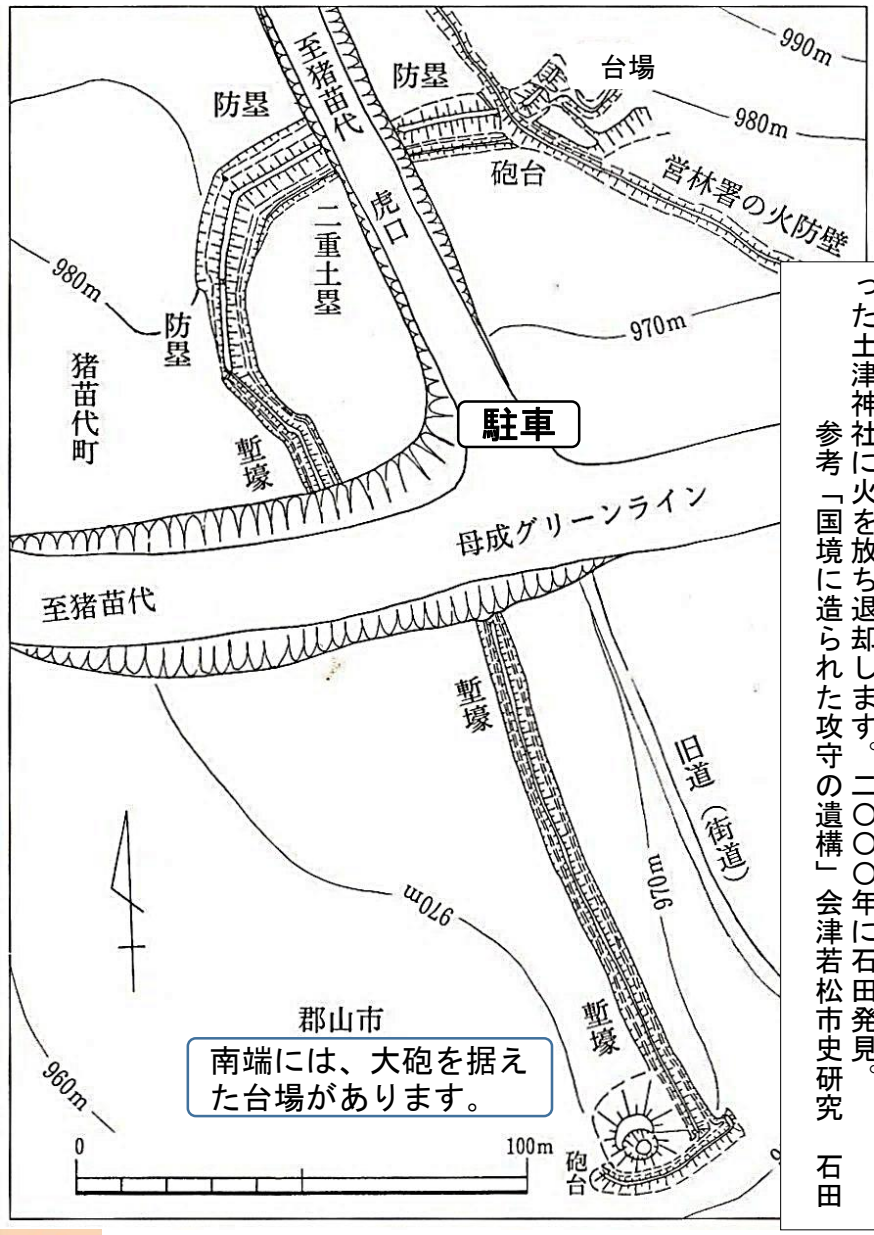
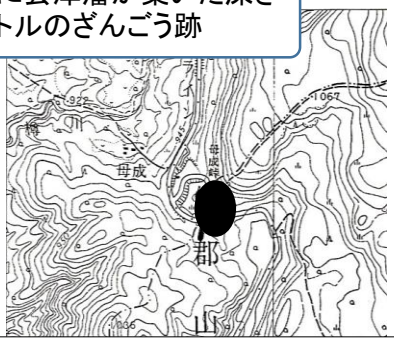
母成峠の陣地跡

明治維新・戊辰戦争では最もよく残された遺構

1600年に築かれた防塁を改修したと思われる高さ約4メートルの防塁跡

1868年に会津藩が築いた深さ0．8メートルのざんごう跡





福島県耶麻郡猪苗代町と郡山市熱海町との境に位置する母成（ぼなり）峠には、県道に分断された江戸時代の街道と、戊辰戦争時に会津藩が構築した陣地跡があります。北側の防塁は、上杉景勝時代に築かれた防塁のようで、それを再利用し、南側に延長して戊辰戦争時「胸壁」（きょうへき）と呼んだ塹壕（ざんごう）を付け足しています。全長約四三〇メートルあります。また、営林署が築いた火防壁もあります。

慶応四年（一八六八）八月二十一日（現在の十月六日）西軍は、東から土佐の谷干城が約一千人で進攻、本道を土佐の板垣退助、薩摩の伊地知正治が約千三百人、薩摩の川村純義が約三百人で攻めてきます。峠頂上には、会津藩の田中源之進、旧幕府軍の秋月登之助、大鳥圭介、新選組の土方歳三や斎藤一、二本松藩の丹羽丹波や会津藩の農民で組織された約八百人が、防塁や塹壕を掘って守っていました。この戦いで西軍は二十五人、東軍は農民三十二人を含む八十八人が戦死。二十二日、西軍は集落に火をつけながら会津若松市の戸ノ口原まで進攻します。猪苗代城代の高橋権太夫（五百石）は自ら猪苗代城と藩主保科正之公を祀った土津神社に火を放ち退却します。二〇〇〇年に石田発見。

参考「国境に造られた攻守の遺構」会津若松市史研究　石田

図・写真・文　©石田明夫2017　問合せ　TEL・Fax　0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索